



高橋義夫

狼奉行

高橋義夫

狼奉行



文藝春秋

狼奉行 奥付

一九九二年三月一〇日 第一刷

著者 高橋義夫
たかはしよしお

発行者 豊田健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三 郵便番号一〇二
電話東京(〇三)三二六五局二二二一

印刷 凸版印刷
製本 矢嶋製本

定価はカバーに表示してあります
万一、落丁乱丁の場合はお取替えいたします

©Yoshio Takahashi 1992 Printed in Japan

ISBN 4-16-313150-7

目次

狼奉行

5

東洋暗殺

83

厦門^{アモイ}心中

113

A D 装画
坂田政則 田代光

狼奉行

狼
奉
行

1

くろずんだ杉の大木戸の両脇に、二人の木戸番が六尺棒を立てて身じろぎもしない。笠にうっすらと雪が積もり、まるで地蔵のようだ。木戸脇の柿の実が真っ赤に熟して雪の上に落ち、遠くから眺めると血が散ったように見える。

祝鞆負は雪に足をとられながら、木戸に近づいて行った。黒く染めた紙衣の羽織、たっつけ袴にわら沓を履いている。笠を上げ、落ちかかる牡丹雪を見て顔をしかめた。広い額に汗が浮かび、上気して頬が赤い。高い鼻梁の脇に面頬がひとつあった。あと一月余りで天明三年の正月を迎えると、鞆負は二十一歳になる。

あっと小さな叫びをあげ、数歩あとから従う中間の丹治が転倒した。状箱や柳行李をひとまとめの荷にして背負い、槍をかついでいたが、荷を雪に埋めて仰向けに倒れ、両手で槍を持ち上げ

て足をもがいた。麓の村からこの黒森山の峠の木戸まで小半日かかって登るうちに、何度足を滑らせたことだろうか。靱負が助け起こしたとき、木戸から二人の武士が雪を蹴立てて走り出、手を泳ぐように動かしながら、駆け寄った。

「祝様でございましょう」

年かきの武士が声をかけた。背は低いが肩幅が広く胸が厚い。疱瘡のあとが菊面になり、片目が塞がりかけて糸のように細い。

「そうだ」

唾でも吐きそうな口調で、靱負は答えた。

「先触れがついさきほど参りましたので、只今御出迎えに参るところでした」

年かきの武士は与力の古沢十兵衛といい、麓の村に出迎えに行くのが遅れた理由をくどくどと述べた。十兵衛は三十五歳である。もう一人の若い与力は安達左織と名乗った。肌が黒く唇が厚い。瘦せて背が高く近寄るとあぶらくさい体臭が臭った。二人とも仙台平の袴を着けているが、擦れて地が薄くなっている。もともと古着だったものをさらに着古したのだろう。風に吹かれて脛があらわになるのが、寒々しい印象を与えた。

「館の者は、これだけか」

と、靱負は二人の顔の間に視線をさまよわせた。

「これだけです。与力が二人、木戸番が二人……」

十兵衛が恥らうような笑いを浮かべる。菊面の中に両眼がかくれて、不思議な顔になった。

山の奥で風が鳴った。三方を白い山が囲んでいる。峰が幾重にも重なっている。風に吹かれ雪が横に流れた。

「初雪です。根雪になるのは、正月過ぎです」

雪が降ることが自分の責任であるかのように顔をしかめ、左織がいう。

「このあたりは上山かろやまとはくらべものにならないほど雪が積もります。少ない年で、六尺から七尺は優に積もります」

と、十兵衛がつけ加えた。

黒森館くろもりだては杉林に囲まれた六十坪ほどの屋敷である。城下から十数里離れている。巨大な萱かやぶき屋根に圧しつぶされそうな玄関の脇に、羽州上山うしゅうかみのやま藩の酸漿はあずきの紋所を描いた高張提灯が立ててある。館の前は広場で、三日月形の池があり、冬はその池に屋根の雪を捨てて。山側に木戸くじかがあり、通行人の取締りをするが、黒森山の奥は遙か月山、湯殿山に連なる深い山なみで、国境くにざかいの木戸を通る者はほとんどいない。

館の内部は上段、中段、下段の三間に分かれ、一尺ほどの段差がある。床の間つきの上段の間は襖を開けると廊下があり、白い敷石の庭を見下す。山代官の調べの間である。鞆負の部屋はそ

の部屋につづく十畳間だった。臆病窓と呼ぶ小さな障子戸がある板敷の中段の間は四部屋に分かれ、与力の十兵衛と左織が一部屋ずつ使っている。障子一枚で庭に面した土間つづきの下段の間には、木戸番二人と中間丹治が寝泊りする。下段と中段にひとつずつ、大きな囲炉裏があった。館の中は冷えて暗い。靱負は牢獄に入って行くような気がした。一年で上山に帰れるか、あるいは死ぬまでこの館で暮らすのか、靱負にはわからない。背後で丹治が大きな音を立ててくしゃみをした。

翌朝、雪は止み、山は色あせた紅葉の色にもどっていた。ぬかるみとなった広場に、麓の村々の村役人が集まった。背負子しよいこに雪囲いに使う山ほどの萱の束を重ねて背負った農夫たちが、つぶれそうに身体を曲げて、一列になって峠道を登ってきた。

土間がひとしきり賑やかになった。俵が蔵に運びこまれる。羽織袴の村役人たちが障子を開け放った下段の間に平伏した。中段の間に膳が並べられ、酒もついている。十兵衛が儀式張った仕草で靱負をその席に導いた。

村役人を代表して、溝延みぞの村名主の藤左衛門が着任の祝辞を述べた。彼の言葉は靱負には半分もわからない。ここは貧しい村、辺鄙へびな山里だと、藤左衛門は悲嘆にくれるような口調で、何度もくりかえした。

祝の家では儉約をむねとして、酒はたしなまない。膳も一汁一菜が普通である。川魚や山菜の膳は、ぜいたくだった。酒は下げるようにと、鞆負は傍に控える丹治に命じた。すると、十兵衛がにじり寄り、耳うちした。

「御奉行……」と、十兵衛は呼びかけた。「村には村の作法がありまして、この者たちはみな御奉行のお流れを待っております。あまりむずかしいことをおっしゃらずに、どうか盃をお取りください」

「御奉行と呼ぶのはやめていただこう。拙者は奉行ではない。山代官の下役に過ぎぬ」

十兵衛は困惑したように目を伏せ、頭をかいた。

「しかし、御奉行。ここではそう呼んでいるのです」

十兵衛は盃を目の高さに捧げ、かたちだけ、かたちだけと、ささやく。鞆負を上座に置いて奉行、奉行と祭り上げ、結局は自分のいう通りにさせるつもりである。下段の間に居並んだ村役人たちが上目づかいに鞆負の表情をうかがった。

「郷に入りては郷に随い、俗に入りては俗に随い、境に入らば禁を問えと、唐土ではいうそうです。かたちだけ」

と、十兵衛は強いる。鞆負は苦々しい顔を横に向けた。しかし十兵衛はあきらめず、小声で御奉行と何度も呼びかける。鞆負がしかたなく盃を口につける真似をすると、人々の顔に安堵の色

が浮かんだ。小半刻ほど相手をしてから、靱負は休息のためにみずからの部屋にひきこもった。彼が去った座敷が急に賑わう気配が、廊下を通じて伝わってくる。靱負は自分が村役人たちに警戒されていたことを感じた。ますます孤立感を深めた。

羽州上山藩は三万石の小藩だが、領地が上、中、下の三郷に分かれている。上郷は城下町を囲む田園地帯、中郷は羽州街道に沿って東は蔵王、北は山形藩に接している。下郷は最上川西岸の城下からは十里もへだたる飛地である。そのあたりは水田と湿原が見わたすかぎりには広がる盆地で、米と紅花の産地である。新庄藩、山形藩、上山藩、天領寒河江代官所支配地が、複雑にいりくんでいる。上山藩の下郷十二カ村は、盆地の西の隅から天下森山、黒森山の山麓にかかる一帯である。

午過ぎに村役人たちがひき上げ、残った十人ばかりの農夫が、振舞酒に顔を赤くし、歌をうたしながら、丸太を組み、萱の束を荒縄でくくりつける。やがて館は萱の壁で覆われた。雪囲いである。館の内部に光が入らず、夜のように暗くなった。

靱負は庭に出て、雪囲いの作業を見守る十兵衛に吐き捨てるようにいった。

「このような暗い館の中で冬ごもりをするのか」

「申しわけありません。こうせぬと雪に押されて館が保ちません」

十兵衛は三度ばかり頭を下げた。彼の顔を見ているうちに、靱負は胸のうちにある憤懣をぶつ

けたくなった。

「今日参った下郷の連中はなにを考えているのかつかみどころがない。盗み見て顔色をうかがっている。拙者をひどく警戒しているようではないか」

十兵衛は意外なことを聞くといったような表情で、靦負の顔を見上げた。なるほど、なるほど、小さな声でつぶやき、唇を歪めて苦笑った。

「いたしかたありません。連中にとって、われらは疫病神やどげしやうがみのようなものですから」

七年前、奥州各地は冷温多雨で稲は青立ちのまま実ることなく、下郷一带は凶作のため多くの餓死者を出した。その打撃から、領民はまだ立ち直ってはいない。

藩の米倉は底をつき、財政はほとんど破綻している。領内の富農からは御用金を借り上げられるだけ借り上げ、領民からは苛酷な年貢の取り立てをおこなう。家中の扶持米が滞ることも珍しくないのです、生活に困窮した家臣は、地方に赴任した機会にまるで強盗同然に領民から米を取り上げるのである。

「新しい御奉行がくるたびに、またそろ米倉をさらわれるのかと、連中は戦々兢兢せんせんきやうきやうとしておるのです。生きるためには、少々のことはいたしかたないかもしれませんが、あまり遠慮なくやられると……。いや、しかし、祝殿、今度の御奉行様はよさそうの方だと、村役人連中は喜んでいましたよ。ええ、これはほんとうの話です」

と、十兵衛はとってつけたようなことをいった。その言葉を、靱負は皮肉と受けとり、不機嫌な顔になった。

上山藩の藤井松平氏は三河十六家のひとつで徳川譜代大名中でも名門である。三河国藤井村の出であることから、藤井松平と称した。関ヶ原合戦の二年後常陸国土浦ひたちなかで三万五千石の大名となり、ついで上野国高崎五万石、將軍秀忠の代に丹波国篠山に移り、山城守に任官する。以来、播磨国明石七万石、大和国郡山八万石と移封をくりかえし、貞享二年松平信之のぶゆきの時代には寺社奉行から老中職となり下総国古河九万石を与えられた。上山に転封を命じられたのは元禄十年、信之の子信通のぶみちの代である。

藤井松平の家臣は移封をくりかえすたびに新たに召し抱えられる者もあり召し放される者もあり、大名となる以前の三河、下総布川からはじまり、土浦、篠山、大和郡山などさまざまの土地の出身者から構成されていた。靱負の祝家は、播州明石以来の家臣である。転封のたびにその土地の者が召し抱えられるのは、土地の習俗に通じた者が統治のために必要だからで、上山に移ってからまた新たに土地の者が召し抱えられ、前任地から移動してきた家臣団と合わせて、三百人ほどとなっている。

この秋の役替えに、靱負は不満だった。父の利左衛門が四十三歳で隠居し、靱負が家督を譲ら